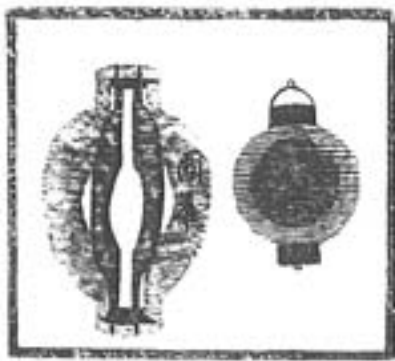


北方圏環境会議

—北国の生活と知恵—

亀谷 隆



ちょうちん「提灯」
ろうそく
蠟燭用の灯火具で、北海道でも明治初期から道内の主要都市に提灯が製造され、日常生活や神事、商店などに使われた。
版画・谷口二郎（札幌）

★南から北への転換

教会の鐘と連絡船の霧笛を聞いて育った函館の街の人は、本州を内地、札幌や旭川など北の地域を奥地と呼んでいた。

今でも、高齢の方々はそう呼び、自己中心的であり、天動説的な意識の市民ともいえる。

昭和45年(1970)、函館から転勤で札幌に赴任し、初めての冬を迎え、降雪量の多いのに驚いた。

当時の住まいは、4戸1棟のアパートで、雪かきはさほど苦にはならなかったが、その後、4階建の官舎の1階に住むことになり、窓やベランダまでが雪に埋もれ、日中でも薄暗い状態での暮らしを経験した。

それから以降、「どうして、冬を考慮しないで建てたのか？」と思いつつ、似たような建物が並ぶ団地を観察し始めた。

行き止まりのある道路、除雪機械が入れない道

幅、除雪した雪を集積する場所のない区画などが多数あることが判明した。

後日、団地造成の基本としたのが、本州の団地であることが分かり、内心「何で地形や季節を考慮せずに計画し、開発したものだ」と一人憤慨して過ごした。

ある時、北欧の建築事情に明るい建築家と酒を飲みながら「札幌に来て、びっくりしたのは、家の前に庭がなく、建物の入口と道路が境界ぎりぎりに接しているのは、除雪に関係あるんでしょね」と聞くと「雪ばかりではないだろう、おそらく、庭を楽しむという心のゆとりが無かったんじゃないだろうか、家庭というのは、庭と家との組み合わせで成立つからね」と答え、続けて北欧に住む人びとのライフスタイルなどについても話してくれた。

これまで、北海道は主に内地からの情報が最良とし、生活や文化を形成してきた傾向があるようで、南志向性生活環境ともいえそうだ。

★北方地域の環境と暮らし

昭和40年(1965)代ころから、北海道が発展するには、長く雪と関わっての歴史を経験してきた北方圏域の知恵や技術を参考にすべきであろうとの声が高まった。

行政も北方に位置する国や州との交流を図るべく「北方圏環境会議」を提唱し、昭和49年(1974)9月に札幌で会議と展示会を開催することにした。筆者は1年間、この会議の推進本部に出向し、「北方圏生活環境展」を担当することになった。

当時、北方圏という言葉も、生活環境という言葉も、今日ほど定着していなかったようで、環境といえば自然のみと意識していたようだ。

そんな時代であったから、展示会を紹介するため外務省を訪ねた時、「北海道で北方圏の会議を」というと「ほう、北海道に北方圏という県ができましたか?」と冗談を言われたりした。

展示会は、北方の国と州との自然や産業、経済や生活、文化や芸術を紹介する展示で、札幌市月寒にあるグリーンドームを会場とした小さな博覧会であった。

展示会を成功させるため産官民が一体となった実行委員会を組織し、展示物や協賛金などの提供

を願うと同時に、多くの人びとに來場してもらうため、北方のシンボルとなる展示物の検討をした。

★アラスカの氷塊、空を飛ぶ

その結果、北極の氷塊を見せることにし、具体的な計画を練った。当初は、50m四方くらいの氷塊にディーゼルエンジンを装備して、北太平洋を自走させようとする計画であったが、船舶でない物体の航行は法的に無理であることから断念した。

次いで、検討したのは氷塊を船舶で曳航^{えいこう}する方法で、これも、曳航船舶、船員業務などの事情より断念、最終的には1塊5t程度で、ジャンボジェット機の貨物口から搬出入できる氷塊を空輸することにした。

しかし、一体誰がアラスカで氷塊を採取するかである。これには、展示プロデュースを担った会社もお手上げであった。

何とか氷を見せたいとの思いで、かつて面識のあったアラスカ政府事務所所長に計画を話したところ「ある日本人がいる、その人に相談すれば実現する可能性はある」とのことで、その人を紹介してもらった。

翌日、東京に向き、紹介された人を訪ね「北方圏生活環境展事業部ですが」と名刺と企画書を差出して氷塊の計画を説明した。

その人は浦河町出身とのことで、「難しいかも知れないが、できる限りの努力をする。引き受けましょう」と快諾を得た。氷の採取場所はアンカレッジ空港に近い場所、大きさは飛行機の貨物として積込み可能な大きさなどを条件とした。

引き受けるとの快諾を得た後、氷の輸入許可を受けるべく通産省に向き、「アラスカから氷を輸入したいんですが？」と輸入許可申請を願ったところ「えっ！氷ですか？」と驚かれ、輸入品目一覧を調べながら「輸入品目がないので、どうしたらいいのかな？取りあえず検討しますが、関税との関わりがありますから大蔵省の意見を聞いてみて下さい」とのことであった。

すぐさま大蔵省に行き「アラスカから氷を輸入すべく通産省に許可申請を願っていますが、関税との関わりについて大蔵省の意見をも聞いてほしいとのことで…」と氷を展示する目的を話した。

「氷ね、いま、氷は1kgどの位の値段ですか？」と問われ「輸入しようとしている氷は、自然がもたらした氷ですから、値段は0円です」と返答すると「0円の物に税金は掛けられないし、溶けて消耗するから再輸出免税手続きも無理のようですので無税です」との見解であった。

その後、通産省に大蔵省の意見を伝えると、通産省は「学術標本として扱いますが、通常の輸入品目でない物品であることを知っておいて下さい」とのことで、輸入申請の許可をいただいた。

★『北方見聞録』を綴り残す

氷はその後、ジャンボジェット機によってアンカレッジ空港から羽田空港に運ばれ、さらに、保冷トラックによって津軽海峡を渡り、札幌に到着した。

約5tの氷は、展示会場の冷凍機付のガラスケースに納められ、氷を見た外国の環境行政関係者は「地球の温暖化や水問題を提起するシンボルとしてふさわしい」と評価し、コンパニオンが「地球が大気に汚染される前の空気が圧縮されています。溶けるときには2000年前の空気が破裂する音がします」の説明に聞き入っていた。

北半球に位置する北海道が、州単位として第1回北方圏環境会議を提唱した影響は大きく、会議はその後、定期的に各国の州で開催され、都市は都市単位として都市環境会議を開催し、北国との経済や産業、生活や文化の交流が盛んになった。



profile

亀谷 隆 かめや たかし

1943年函館市に生まれる。武蔵野美術大学卒業。公立中学校教諭、市立函館博物館、北海道開拓記念館に勤務し2006年退職。北海道大学、北海道東海大学講師を歴任。現在、北海学園大学講師（博物館学）、特定非営利活動法人公共環境研究機構理事長、北海道博物館協会会員、北海道北方博物館交流協会評議員、地域文化開発研究会主宰など。

谷口 二郎 たにぐち じろう

1932年富良野市に生まれる。北海道大学文学部卒業。北海道庁に勤務し1990年退職。約30年にわたり北海道の自然や生活道具などをモチーフとした版画制作の活動を続けている。